

# 旅の異空間

— 地理学と民俗学の間 —

岩 鼻 通 明

## I はじめに

日本における宗教地理学研究および観光地理学研究は近年順調な発展の道を歩み、それらを整理した松井（1）、鶴田（2）、荒山（3）らの若手研究者による秀れた展望論文も発表されている。

にもかかわらず、筆者が本稿の執筆に至った動機は、両者が、一方は文化地理学の枠組みの中で、他方は経済地理学の枠組みの中で、お互いに関連性の乏しいまま調査研究が進展して、個別研究としての細分化がますます強まる傾向が顕著であり、ひいては地理学の解体につながりかねないという不安感によるものからである。

このような傾向は、地理学のみならず、民俗学においても、さらには現代諸科学全体に通じるものであろうが、大

学改革によって地理学科が次々と解体再編されつつある現状において、地理学の存在価値を諸科学に向けて主張することはきわめて重要であり、宗教地理学と観光地理学の接点、さらには地理学と民俗学の接点を模索しようとする本稿の試みも、むしろ関連諸科学の分野に向けてのメッセージとしての性格が強いといえよう。

もつとも、上述の荒山の展望は、観光を文化現象としてとらえており、以下で述べる筆者の理解に共通するところが大きい。残念ながら観光資源と観光現象を近代の産物として把握しており（4）、前近代の観光は除外されている。私見では、前近代の観光現象こそが観光地理学と宗教地理学、さらには地理学と民俗学をつなぐ糸口になるのであり、本稿における考察はその解釈が中心となる。

さて、以下では、前近代の旅に関連する諸分野の研究史を展望して、問題点の整理を行う（第II章）。そして、それを踏まえて、従来の研究視点からは欠落していた村落側からみた旅の実態を日記史料から量的に把握する試みを行い、

日常世界の側から非日常世界としての旅の異空間を逆照射する(第III章)。その成果を導入して、旅の異空間に関するまとめと今後の課題について論じる(第IV章)。

## II 旅の研究史と課題

### (1) 地理学における研究史

観光地理学および宗教地理学において、旅の研究史の整理はある程度行われてきた。たとえば、観光地理学研究の第一人者である山村は日本近世の杜寺参詣と湯治の旅を紹介しているが、それらは観光地域の発達過程の一環として理解されている(5)。それに対して、旅を観光面と宗教面から取り上げた意欲的な試みもみられるが、共著という制約上、どうしても相互の一体的な把握に不十分な部分が残されている(6)。

一方、松井の展望において旅日記を題材とした宗教地理学研究は既に紹介されているので(7)、ここではそこに欠落していた批判的紹介とその後発表された文献に限定した論及を行いたい。従来の旅日記を題材とした歴史地理学的研究は東日本の史料を中心に展開してきたが、近年は西日本の播磨国からの伊勢参詣を扱った小野寺(8)や東西の伊勢参詣の旅の差異を指摘した橋本(9)の論文が発表さ

れるに至っている。

歴史地理学は、旅の空間行動のミクロな復元を重視すべきとの提唱もあり(10)、古道の復原などは確かに歴史地理学の重要な分野として成立してはきたが、そのみでは歴史学に基礎的データを提供するのみに終わってしまい、新しい地理学としての自己主張には乏しいと言わざるを得ない。

たとえば、船の利用に関する詳細な研究成果が発表されたが(11)、ミクロレベルでの航路利用の比較も必要ではあるけれども、マクロレベルで、日本においても中国大陸の「南船北馬」と同様に、東西で大きく様相を異にするという文化論的指摘が重要ではなからうか。事実、東日本からの信仰の旅においてはほとんど船は使われず、使われたとしても短距離や夜船の利用が大部分であるのに対して(西日本での金毘羅参詣などには航路を利用している)、西日本からの信仰の旅は瀬戸内水運を大いに利用している。また、東国の廻船商人が西国各地の名所見物をした記録は残されているが(12)、逆に西国の廻船商人が東国を見聞した例は希有にしてみない。この差異が中世以来の瀬戸内水運の伝統に由来するものかどうかは十分明らかではないが、信仰の旅にも東西の文化的な違いが反映していることを指摘することが重要であらう。

今や、旅日記研究は資料収集の段階から、総合的分析の段階にさしかかっており、本稿は別稿(13)とともにその第一歩を目指すものである。

なお、ミクロレベルでの研究としては、道標から交通圏を復元する試みが注目される(14)。旅との関わりで、都市図や案内記を論じた研究もみられるが(15)、原点として矢守の一連の研究(16)を再度見つめ直す必要がある。

## (2) 民俗学・歴史学・人類学における研究史

民俗学や歴史学においても、近年の旅に関する調査研究の進展は著しいものがみられる。

難波は旅日記にみえる浄瑠璃見物などの記載から、民衆の芸能や伝承に関する知識を探り出した(17)。山本は四国の庄屋たちの書き記した旅日記を題材として四国遍路を分析した(18)。深井は街道交通史研究の蓄積の上に立つて、旅日記を中心に近世の女性の旅を分析し、女性の抜け参りや関所通行の実態を明らかにした(19)。

また、柴は、長年にわたって百五十点を越える女性の旅日記史料を収集し、それらの分析から近世の女性の旅の諸相を解明し(20)、前田は女流文芸として旅日記を分析した(21)。板坂も近世の女性と旅の関係を論じた(22)。小野寺は近世の東播磨からの伊勢参宮には未婚の娘が数多く同行したことを明らかにした(23)。筆者も、女性を伴う旅日記

史料の分析から、近世の女人禁制の実態の解明を試みたことがある(24)。一方、落語から近世の旅を論じた研究成果が出されたが(25)、このような日本文化における旅の位置付けをさらに多面的に分析していく必要がある。

ところで、旅の民族的特性を論じる分野として、観光人類学があげられる。観光人類学は、近年、人類学の新たな分野として調査研究が活性化しつつあるが、その提唱者のひとりでもある石森の論文にまず言及したい(26)。石森は、日本の前近代の観光を「聖・俗・遊」というパラダイムで把握したことに特徴がある。彼はグラバーンが提起した「祈り・払い・遊び」のパラダイムに導かれて「聖・俗・遊」の三元論を提唱したが、グラバーンも原則論としては聖俗論に立脚しており(27)、この三元論が日本の特殊性かどうかが問題となる。

いわゆる聖俗論ないし「ハレ・ケ」論は久しく論議が続けられており、聖と俗という二元論を超えて、最近「聖・俗・遊」ないし「ハレ・ケ・ケガレ」のような三元論が次々に提唱されるに至っているが、これらの論争も近年発行された二冊の著書において、それぞれ周到な再検討の下に、いちおうのとりまとめがなされたと考えられる。まず、関根は文化人類学の学説史の整理から「不浄」と「ケガレ」を区別して把握する立場をとっており、ケガレは境界性と

他界性を有すると指摘している(28)。この境界性と他界性は巡礼論・参詣論に通じるものがある。一方、伊藤は聖俗論および「ハレ・ケ・ケガレ」をめぐる民俗学的モデルを批判的に検討して、非日常と日常という二項対立モデルを設定し、非日常的世界を超日常的世界と反日常的世界に類別した(29)。

しかし、私見では、これらの立論も地理学的立場からは十分とはいえず、聖俗論は空間的展開が考察されるべきであり、俗世間と呼ばれるような空間を日常生活空間と理解すれば、聖なる空間はそこから離れた非日常的空间、すなわち「旅の異空間」であると理解することができる。上述の「聖・俗・遊」のモデルは、旅についての空間的立論としては評価されるが、「遊」という新たな指標を設定することが妥当であるかどうかは、この指標の設定によって新たな展望を開拓することが可能かどうかという点にかかっている。

ところが、いわゆる「精進落とし」も信仰の旅の行動過程の一環であって、これを単独視することには限界がある。「精進落とし」自体が、全くの遊びではなく、通過儀礼としての色彩を有しているという事実がある以上、わざわざ「遊」を切り離して理解する必要は無い。芝居見物なども、いわゆる異文化体験の一環であると理解すれば、それを全

くの遊びであるときなしてしまふよりも、真野の「信仰か、楽しみか」という近代の二者択一的・相互対立的倫理観はここには存在しない。むしろ信仰の中にこそ遊樂がひそんでいる」との指摘(30)のように、やはり通過儀礼の一環であったと理解するほうが展望は開ける。

もし、「遊」を強調するのであれば、聖域の周縁部に「遊」に関わる空間が存在すること(たとえば伊勢の古市の例をみよ)を実証的により強調すべきであろう。

同様に、伊藤のモデルの超日常的世界と反日常的世界も、これと同様に「聖」と「遊」に相当するものであり、あえて類別するよりも一体のものとして理解すべきではなからうか。すなわち、それらは両義的な色彩が強く、あえて類別することに大きな意味があるとは言いがたい。

一方、「観光人類学」に対して、神崎は「観光民俗学」を提唱しているが(31)、個々の指摘は興味深いものの、師の宮本常一の遺産(32)の域を越えていないのではなからうか。宮本の遺産も論議の出発点として見直すべき価値は大きい。

なお、博物館においても、余暇の近代化に関する企画展が行われたことを付言しておきたい(33)。

さて、以上の研究史の展望から問題となるのは、巡礼と遠距離参詣の関係である。従来は巡礼は数多くの霊地を巡

回する旅、参詣は特定の社寺を往復する旅として区別されてきた。たとえば、青木は日本の巡礼を遍路型と参詣型に区別し、四国遍路や西国巡礼は遍路型、伊勢参りや熊野詣では参詣型とする(34)。

ところが、旅日記にみる遠距離参詣の旅は、特定の社寺を往復するという行程はむしろ例外であり、数多くの霊地を巡回するという点において、巡礼と共通性が存在することが明らかにした(35)。

たとえば、東日本からの遠距離参詣の場合、伊勢参宮といつても西国霊場のかかりを巡拝し、善光寺などにも立ち寄ることが一般的であり、西国巡礼の旅と称しても、伊勢参宮や善光寺参詣が伴うことが多く、その内容はあまり変わりがない。

小野寺は近畿地方の伊勢参宮は社寺巡りを行わなかったとするが(36)、一事例から結論を即断するのはいささか早計であり、むしろ伊勢からの距離に対応した同心円構造の中で、参宮の特徴を分析すべきであり、近畿地方といつても伊勢からの遠近に対応して、参宮に地域差が存在するのは当然であろう。たとえば、東海地方からの伊勢参宮においては、最短距離を往復する行程が一般的であるが、この場合においても、行き帰りで異なる宿場や茶店を利用したり、往路に宮と桑名間の海上七里の渡しを使えば、帰路は

木曾三川を渡る陸路を通るといった、往復で経路を使い分ける行程が顕著にみられる(37)。

また、宿場町が小規模集落でありながらも「町」立てされていたという事実は、街道という異空間に面するためであり、町立てされていない村落においては、「辻」という異空間が旅人などのために設定されていたとみることもできよう(38)。ミクロレベルの視点は、このような分析に活用されるべきであろう。

さて、前近代の旅の特徴は、たとえば女人禁制などのさまざまな禁忌が存在したことにも認められ、それらは文化地理学で把握可能な空間的特性も保持している。詳しくは拙著(39)で既に論じたため本稿では繰り返さないが、若干の文献を補足して論じれば、中世の女性の信仰の旅の安全が社寺参詣の象徴としての掛帯によって守られていたとの論は興味深い(40)。田中も女性の旅に言及しているが(41)、現実的な女人道の復元に力点が置かれるなど、文化地理学的な関心がやや薄いのではなからうか。

### (3) ヨーロッパにおける研究史

一方、ヨーロッパにおける前近代の旅を取り上げた研究も近年増加している。喜安は職人の旅などを基層に置いた文化論を展開した(42)。しかし、同時代の旅の比較では、ヨーロッパよりも日本近世のほうが、はるかに庶民の移動

や旅が盛んであったことが指摘されている(43)。元禄期に來日したケンペルの指摘もこれを裏付けている(44)。旅の実状としては、たとえば司教巡察の困難な旅の実状が紹介されている(45)。また、臼田はイギリスの宿屋の実態を紹介した(46)。近世の旅を啓蒙思想の熟成の場とみなす見解も存在する(47)。巡礼研究も多くの成果がみられ、中世の巡礼者の多角的分析や(48)、中世後期には五十万人もの巡礼者を集めたというサンティヤゴ・デ・コンポステーラの巡礼地と巡礼者に関する分析もなされているが(49)、日本人研究者による現地調査を踏まえた研究成果も現れつつある(50)。また、中世の旅の全体像の詳細な検討から、中世の旅は特定の階層の特権ではなく、たとえば女性の巡礼者は全体の四分の一から三分の一を占めたとの結論が提起されている(51)。それに対し、ヴィクトリア時代のイギリスにおけるリゾート開発と観光ブームを論じたものも近年数多く刊行されている(52)。

### Ⅲ ムラからみた旅人

#### (1) 分析の視点

「旅の異空間」を論じるには、従来の研究において欠落していた視点として、逆説的ではあるが、ムラの側が旅立つ

ていった人々をどのように評価していたかを分析すること也不可欠である。基礎地域としてのムラと外部空間との関連を考察する場合、旅日記という外部空間側の資料のみならず、ムラ(基礎地域)側の資料(たとえば村人の手による日記類など)にも着目して両面から総合的に検討することが必要である。昔話の分析からも旅が学問の場でもあったことが論じられている(53)。旅人はムラにとつて貴重な情報源でもあった(54)。ムラに出入りする漂泊の宗教者やムラに戻ってきた旅人たちによつて前近代的な「知の体系」が形成されていた(55)。

ところで、この立論のヒントとなったのは、気候学における日記史料を活用した古気候の復元研究の諸成果(56)、および時間地理学研究(57)などの近年の新しい地理学の研究成果からの刺激を受けたことによるところが大きい。近年は、この視点からの研究成果も現れつつある(58)。

さて、滋賀県が多賀大社の近辺では、俗謡に「伊勢へ七度、熊野へ三度、お多賀さまには月参り」と唄われるように、近距離参詣の場合は月参りが行われる一方で、遠距離参詣は一生に数度の大事業であった。ただ、月参りのような近距離参詣は、おそらく通行手形を持たなかったのではないかと憶測される。この俗謡から仮説を立てれば、近距離参詣は日記史料に繁雑に現れ、遠距離参詣になるほど出

現頻度が少なくなると考えられる。この仮説を以下の三点の事例から立証を試みたい。いずれも、本人の参詣のみならず、日記に記述された参詣のすべての記録を集計したものである。

## (2) 柿野村理兵衛の日記にみる杜寺参詣

第一の史料は柿野村（現岐阜県土岐市）庄屋理兵衛の天保十三年（一八四二）から慶応二年（一八六六）までの日記から、杜寺参詣に関連する記述を取り出したものである（59）。この第1表において、三国山から白鳥までは近在の杜寺への参詣であり、豊川から須原までは数日間を要する中距離の参詣、秋葉山から四国までは一週間以上を要する遠距離参詣として区分した。

結果的には秋葉山が最大の出現頻度を示しており、むしろ遠距離参詣が前面に出てきている。しかし、秋葉山参詣は代参講の形式をとっており、村人の代表が定期的（秋葉山は火伏せ信仰であるため、火事の直後にも参詣者を出している）派遣されていた（60）。ここに組織化された信仰の姿をみることができる。それに対して、中距離から近距離になるほど、参詣は個人的で不定期（祭礼時など）になる傾向がみられる。

また、近距離参詣は各地の杜寺に分散する傾向もあり、総計では中距離と遠距離参詣を上回っており、さらに日記

にわざわざ書き留められることのなかった場合も想定すれば、やはり近距離参詣が量的には頻繁であったといつてよく、先の仮説はおおむね立証されたといえよう。

## (3) 東山口村宇兵衛の日記にみる杜寺参詣

次に、東山口村（現和歌山県印南町）の肝煎であつた依岡宇兵衛の日記にみる（61）、嘉永二年（一八四九）から文久二年（一八六二）までの杜寺参詣を抜き出してみよう（第2表）。

この場合も、近距離参詣は和歌祭礼（和歌山城下ないし和歌の浦と思われる）が目立つ程度で、それほど突出してはいないが、この日記によれば和歌山城下に出る機会が村人にとって頻繁に存在したため、記録に現れない参詣が多かつたものと想定される。

また、山上参りは「梅吉十六歳二而参り」との記載があり、成人儀礼としての意味付けが存在したものと考えられる。西国順拝の場合は同行十八人中八人前後の女性が含まれており、伊勢への講参りの旅においても「治助内」といった夫人の参詣が数人みられ、熊野参詣にも女性が含まれていた（熊野三山は女人禁制ではなかった）。

その一方、安政二年の依岡宇兵衛の参宮には十六歳と十三歳、そして十四歳の娘が同行しており、この場合も成人儀礼としての意味付けが存在したものと思われる。この伊

勢参りは吉野山、当麻寺、法隆寺、西大寺、長谷寺、三井寺、天満天神、天王寺などの名所旧跡を巡拝しており、先の小野寺の近畿地方の参宮は社寺巡りをしないとする仮説(62)への反証となる。

なお、新四国は小豆島の島四国巡礼の可能性も想定されるが、詳しい記述がないため、断定はできない。この事例においては近距離参詣と中・遠距離参詣の差異をさほど明確にはできなかったが、いずれにせよ、周辺の著名な聖地への参詣がしばしば行われていたことは確認できる。

#### (4) 獅子ヶ谷村昼間家日記にみる社寺参詣

最後に、獅子ヶ谷村(現横浜市鶴見区)の昼間家日記から(63)、明治四十二年(一九一〇)より大正七年(一九一八)に至るまでの社寺参詣を抜き出してみよう(第3表)。

この日記は近代の史料であるためか、前二者に比べれば社寺参詣の記録はさほど多くない。日帰りの参詣記録となっている大師(川崎大師か)と観世音は近在に存在したものであると、光明寺は村内の寺院である。寺尾も隣村であり、遠距離参詣としては成田不動と宗吾霊神に同日に参詣した程度であり、浅草観音参詣はむしろ東京見物の色彩が強い。社寺参詣と並んで、蒲田菖蒲園見物や海水浴、上野博覧会見物、浅草花屋敷見物などの記載が散見し、時代の変化を読み取ることができる。

### 旅の異空間

一方、遠距離参詣は既に変質しており、長野・日光方面への旅と琵琶湖方面への旅が日記に記録されているものの、そこには竹生島・嵐山・東山見物というような記述はあるけれども、社寺参詣をことさら強調するような記載はほとんどみられず、近代的な観光旅行の色彩が強い。

ただし、村内での講集団の組織は残存しており、伊勢講の日待や地神講・念仏講などの行事や参宮者による土産物の持参、大山参詣の記録はみられない」といった記述が散見する。農業の休み日はあまり多くないが、その大部分が講などの行事に関わるものとなっている。しかし、次第に祭日のような国家的祝日の記載が増加しつつあることが知られる。

この事例では、近距離参詣は比較的多く見られるが、名所見物と併存する形になっており、一方で、遠距離参詣は観光旅行化しているという、まさに近代化と近世の習俗のはざまに生きた村人の姿をとらえることができる。

#### IV おわりに

巡礼は一つのコスモロジカルな円環運動であり、円環的な行動をとることによって、人々は新しい心の次元を獲得するとの指摘がなされている(64)。巡礼地は一種の特異点



であり、特異点を巡る循環的行程をとって再び出発点に戻ってきた際には、参詣者は出発前とは異なる新しい次元に到達しており、いわゆる「サカムカエ」は異次元空間から戻ってきた参詣者を日常的空間に受け入れるための儀礼であると考えられる。社寺や巡礼地は位相地理学における求心性を有する特異点であり(65)、このようなトポロジカルな視点から巡礼と参詣を再認識することも重要であろう。

さて、本稿で十分論じることのできなかった課題として、旅の近代の変容の問題がある。この背景には交通機関の発達と欧米文化の流入という二つの要素が複雑に絡み合っており、たとえば信仰登山からアルピニズム登山への変化にもその両面をうかがうことができる。この問題について、イギリスを事例とした研究が見事にまとめられているが(66)、前近代の旅の様相が日本と欧米では大きく異なるため、ここでも日本の特殊性を踏まえて、この問題は論じられねばならない。

宗教学では「世俗化理論」でこの変容が説明されてきたが、真野は巡礼を主題として日本近代の旅と宗教の関わりを検討した(67)。この問題をさらに一般化して考察を続ける必要がある。社会学の立場から風景感・地球認識の近代化を論じた研究もみられるが(68)、このような進歩主義的歴史観からは抜け落ちる側面も大きい。古地図研究の新

展開はまさに進歩主義的歴史観からの脱却であったことを想起すべきであろう(69)。

その意味で、明治二十三年のおかげ参りには、近世的な記憶と近代の諸制度が複雑に絡まりあいながら作用しており、これを民衆の心性の持続と変容のプロセスとして、他方では権力のトポロジカルな布置の変化として問う必要があるとの吉見の指摘は示唆的である(70)。地理学においては、小口が近代の海水浴受容を論じており(71)、このようなテーマをさらに一般化して、その変容過程を連続と非連続の両方の視点から追及していくことが今後の展開にとって不可欠であろう。

ところで、「二十一世紀の基幹産業は観光産業」という声も大きい(72)、あくまでも観光行動は非日常的行動であり、日常的産業として観光産業が成立するかどうかはリスクが大きい。列島改造論の時代とバブル経済の時代にも、観光産業が過疎脱却や地域振興の切り札として掲げられたことがあったが、世の中はそう甘くはなかったことを反省すべきではなからうか。このような現代的課題にも応用は十分可能であろう。

たとえば、最近もてはやされているグリーン・ツーリズムなる現象も、農村の日常的生活の場としての時空間に都市民の非日常的時空間が溶け込めるかかどうかが課題とな

ろう。観光地では、従来から都市化地域における混住化現象と共通する問題が、地元住民と観光客の間に生じており（越後湯沢のリゾートマンション地域でも生じている）、このような問題にも共通する側面がある。かつての「サカムカエ」のような儀礼を現代の観光客向けにも創出する必要があるのではなからうか。

また、聖地・聖域・聖なる空間論についても、十分な言及に至らなかった。この分野については宮家の宗教民俗学からのまとめがなされており（73）、他日を期したい。同様に巡礼論も深化させることが不十分であった。この領域も近年種々の成果がみられるため（74）、機会を改めて論じたい。

以上で述べてきたように、この分野は今後の学際的研究の進展の可能性が大いに期待されるため、地理学および民俗学の分野の若手研究者の活躍を期待して、本稿を終えたい。

〔付記〕本稿の第Ⅲ章は、文部省科学研究費奨励研究（一九九〇年度）の成果の一部であり、その概要は一九九七年の歴史地理学会大会において発表したが、成文化するまでに、相当の時間を要したことをご教示、ご指導いただいた方々にお詫びしたい。さらに、その他の章も文部省科学研究費

## 旅の異空間

（一九八五・一九九一～九二年度）の成果を反映していることを付記しておきたい。

### 注

- （1） 松井圭介「日本における宗教地理学の展開」人文地理四五・五、一九九三年。
- （2） 鶴田英一「観光地理学の現状と課題・日本の英語圏の研究の止揚に向けて」人文地理四六・一、一九九四年。
- （3） 荒山正彦「文化のオーセンティシティと国立公園の成立―観光現象を対象とした人文地理学研究の課題」地理学評論六八・一二、一九九五年。
- （4） 前掲（3）参照。
- （5） 山村順次『観光地域論』古今書院、一九九〇年。山村順次『新観光地理学』大明堂、一九九五年。
- （6） 淡野明彦・田中智彦『旅のエチュード』昭和堂、一九九三年。
- （7） 前掲（1）参照。
- （8） 小野寺淳「東播磨における近世の伊勢参宮・明石市東二見を事例に」交通史研究三五、一九九五年。
- （9） 橋本俊哉「江戸後期の「お伊勢参り」の旅にみる行動特性・『参宮日記』の分析をもとに」立教大学応

用社会学研究三七、一九九五年。

- (10) 田中智彦「大坂廻りと東国の巡礼者・西国巡礼路の復元」歴史地理学一四二、一九八八年。

- (11) 田中智彦「近世社寺参詣道中日記にみる渡船・航路の利用」科研費報告書、一九九六年。田中智彦「道中日記にみる金毘羅参詣経路・東北・関東地方の事例」日本宗教文化史研究二、一九九七年。

- (12) 佐藤利夫編『海陸道順達日記』法政大学出版局、一九九一年。

- (13) 岩鼻通明「道中記にみる霊地」『日本「霊地・巡礼」総覧』新人物往来社、一九九六年。

- (14) 吉村光敏・白井豊「道しるべからみた近世の交通圏・上総・下総地方の道しるべを例として」千葉県立中央博物館研究報告・人文科学一・三、一九九一年。

- (15) 山田浩之「近世大和の参詣文化・案内記・絵図・案内人を例として」神道宗教一四六、一九九二年。山近博義「近世奈良の都市図と案内記類・その概要および観光との関わり」奈良女子大学地理学研究報告、一九九五年。

- (16) 矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、一九八四年。矢守一彦『古地図への旅』朝日新聞社、一九九二年。

- (17) 難波信雄「道中記にみる近世奥州民衆の芸能知識と

伝承」東北学院大学東北文化研究所紀要二六、一九九四年。

- (18) 山本和加子『四国遍路の民衆史』新人物往来社、一九九五年。

- (19) 深井甚三『近世女性旅と街道交通』桂書房、一九九五年。

- (20) 柴桂子「近世女性の旅日記から」交通史研究二七、一九九一年。柴桂子「近世おんな旅日記」吉川弘文館、一九九七年。

- (21) 前田淑『江戸時代女流文芸史「旅日記編」』笠間書院、一九九八年。

- (22) 板坂耀子『江戸の旅と文学』ペリかん社、一九九三年。

- (23) 前掲(8)参照。

- (24) 岩鼻通明「旅日記にみる女人禁制の民俗文化的研究」科研費報告書、一九九三年。

- (25) 旅の文化研究所編『落語にみる日本の旅文化』河出書房新社、一九九五年。

- (26) 石森秀三「旅から旅行へ」(守屋毅編『日本人と遊び』ドメス出版)一九八九年。

- (27) ネルソン・グラバーン「観光活動―聖なる旅行」(バレーン・スミス編(三村浩史監訳)『観光・リゾート

ト開発の人類学』勁草書房）一九九一年。なお、橋本和也『観光人類学の戦略』世界思想社、一九九九年、は、巡礼の延長線上に観光を捉えるグラバーンの立場に批判的であるが、その批判自体が不徹底ではなからうか。

(28) 関根康正『ケガレの人類学』東京大学出版会、一九九五年。

(29) 伊藤幹治『贈与交換の人類学』筑摩書房、一九九五年。

(30) 真野俊和「旅・巡礼・遊山―近世参詣事情」(竹内誠編『日本の近世14 文化の大衆化』中央公論社) 一九九三年。

(31) 神崎宣武『観光民俗学への旅』河出書房新社、一九九〇年。

(32) 宮本常一『旅の民俗と歴史1〜10』八坂書房、一九八七〜一九八八年。

(33) 石川明範・千田孝明編『行楽・観光・レジャー』余暇の近代化』栃木県立博物館企画展図録、一九九三年。

(34) 青木保「現代巡礼と日本文化の深層」(ヴィクター・ターナー、山口昌男編『見世物の人類学』三省堂) 一九八三年。

## 旅の異空間

(35) 岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版、一九九二年。

(36) 前掲(3) 参照。

(37) 坂部哲之「伊勢参宮交通路に関する考察」地方史静岡一七、一九八九年。

(38) 宮田登「妖怪の民俗学―日本の見えない空間」岩波書店、一九八五年。内田忠賢「江戸人の不思議の場所・その人文主義地理学的考察」史林七三、六、一九九〇年。

(39) 岩鼻通明『出羽三山の文化と民俗』岩田書院、一九九六年。

(40) 金森敦子「帯と貞操」(赤坂憲雄編『漂泊する眼差し』新曜社) 一九九二年。

(41) 前掲(6) 参照。

(42) 喜安朗『近代の深層を旅する』平凡社、一九九六年。

(43) 水谷三公『江戸は夢か』筑摩書房、一九九二年。

(44) 守屋毅「ケンペルのみた元禄の社会と文化」(ヨージフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』日本放送出版協会) 一九九六年。

(45) パオロ・サントニーノ(舟田詠子訳)『中世東アルプス旅日記』筑摩書房、一九八七年。

(46) 白田昭『イン イギリスの宿屋のはなし』寝々堂出版

版、一九八六年。

- (47) 高橋安光『旅・戦争・サロン・啓蒙思潮の底流と源泉』法政大学出版局、一九九一年。

- (48) レーモン・ウルセル(田辺保訳)『中世の巡礼者たち・人と道と聖堂と』みすず書房、一九八七年。

- (49) アルフォンス・デュブロン(田辺保監訳)『サンティヤゴ巡礼の世界』原書房、一九九二年。

- (50) 西海賢二「聖地・サンチャゴ巡礼への道」(1)「東京家政学院大学紀要三九、一九九九年。小田匡保「ドイツ南部アルトエツティングへの徒歩巡礼」その現状を中心として」(巡礼研究会編『巡礼論集1 巡礼研究の可能性』岩田書院)二〇〇〇年。なお、ヨーロッパにおける観光空間の形成を文化地理的に論じた西村孝彦『文明と景観』地人書房、一九九七年、は本稿の論旨と密接に関連する貴重な研究成果であり、西村氏の早逝が惜しまれる。

- (51) ノルベルト・オーラー(藤代幸一訳)『中世の旅』法政大学出版局、一九八九年。

- (52) 荒井政治『レジャーの社会経済史』東洋経済新報社、一九八九年。指昭博編『祝祭がレジャーに変わるとき―英国余暇生活史』創知社、一九九三年。本城靖久『トーマス・クックの旅・近代ツーリズムの

誕生』中央公論社、一九九六年。

- (53) 武田正『火もらい婆考―昔語りのキーワード』置賜民俗学会、一九九六年。

- (54) 福田アジオ『可能性としてのムラ社会・労働と情報の民俗学』青弓社、一九九〇年。

- (55) 西海賢二他『浮浪」と「めぐり」―歓待と忌避の境界に生きて』ポラ文化研究所、一九九一年。

- (56) 東村康文「19世紀前半における日本の自然季節の長短と季節進行」地理学評論六五・一八、一九九二年。

- (57) 川口太郎・神谷浩夫「都市における生活行動研究の視点」人文地理四三・四、一九九一年。

- (58) 山本光正「近世における地域旅行圏と長期の旅―上総国望陀郡大谷村の場合」日本海地域史研究一三、一九九六年。成松佐恵子「庄屋日記にみる江戸の世相と暮らし」ミネルヴァ書房、二〇〇〇年。

- (59) 『土岐市史(二)』一九七一年。

- (60) 堤谷金平・遠山佳治「秋葉山参詣コースの考察(1)―歴史学と民俗学の接点を求めて(4)」愛知学泉大学研究論集二七、一九九二年。

- (61) 『印南町史 史料編』一九八七年。

- (62) 前掲(8) 参照。

- (63) 神奈川県立博物館編『神奈川県民俗調査報告書十八

農耕習俗と農具・昼間家日記を中心に』神奈川県立博物館、一九九〇年。

(64) 千田稔『うずまきは語る 迷宮への求心性』福武書店、一九九一年。

(65) 水津一朗『地域の構造』大明堂、一九八二年。

(66) ジョン・アーリ(加太宏邦訳)『観光のまなざし・現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、一九九五年。

(67) 真野俊和『日本遊行宗教論』吉川弘文館、一九九一年。

(68) 佐藤健二『風景の生産・風景の解放』講談社、一九九四年。山下晋司「観光の時間、観光の空間・新しい地球の認識」『現代の社会学6 時間と空間の社会学』岩波書店、一九九六年。

(69) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上・下』地人書房、一九八八・一九八九年。

(70) 吉見俊哉「境界としての伊勢」(赤坂憲雄編『方法としての境界』新曜社) 一九九一年。

(71) 小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」人文地理三七―三、一九八五年。

(72) 高田公理・石森秀三編『新しい旅』のはじまり・観光ルネッサンスの時代』PHP研究所、一九九三

年。

(73) 宮家準『宗教民俗学』東京大学出版会、一九八九年。

(74) 山折哲雄他『巡礼の構図』N T T出版、一九九一年。真野俊和編『講座日本の巡礼 全3巻』雄山閣、一九九六年、など。

第1表 柿野村理兵衛の日記にみる社寺参詣

社 寺 名	参 詣 回 数	備 考
三国山	9	
金比羅	5	
雨宮	5	
市野々村八剣	3	
阿木妻の神	2	
久保村千手薬師	1	
白鳥	1	
豊川	6	3日間
津島	5	4日間
遠州桜ヶ池	2	
熱田	1	
須原	1	美濃市
秋葉山	11	6〜8日間 代参
伊勢	5	10〜13日間 代参

御嶽山	2	9日間
信州善光寺	1	
四国	1	立願
三州三の木稻荷	1	位置不明
妙見	1	位置不明
刀長八幡	1	位置不明
道寺観音	1	位置不明

第2表 東山口村宇兵衛の日記にみる社寺参詣

社 寺 名	参詣回数	備 考
八幡宮御礼参り	1	
和歌祭	3	
かんば入湯	1	高郡神場温泉
新四国参詣	2	7日間
熊野参詣	2	12日間
伊勢参り	3	15、30日間
吉野大峰山開帳参詣	2	8日間
(山上参り)		
西国順拜	1	42日間
高野山・新四国参詣	1	
高野山・水間寺参詣	1	15日間

第3表 獅子ヶ谷村屋間家日記にみる社寺参詣

社 寺 名	参詣回数
大師	5
観世音	3
光明寺	2
下田地蔵尊	1
川崎医王寺	1
大師穴守	1
成田不動	1
宗吾霊神	1
義高入道	1
浅草観音	1
熊野神社	1
寺尾祭	1